

鷗外選集

第三卷

鷗外選集 第3巻 (全21巻)

1979年1月22日 第1刷発行 ©

1979年3月5日 第2刷発行

¥ 980

著 者 ^{もり}森 ^{りん}林 ^た太 ^{ろう}郎

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 ^{株式}岩 波 書 店
^{会社}

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

藤柄絵	五
蛇	二
心中	三九
鼠坂	五三
羽鳥千尋	六五
百物語	八五
ながし	一〇三
妄想	一二三
カズイスチカ	一四三
流行	一五七

不思議な鏡	一六九
食 堂	一八三
田 楽豆腐	一九三
雁	二〇五
解 説	三二一

小
說
三

藤
柄
絵

冒険といふ詞は、^{アワンチュール}aventureを故人森田思軒が訳して、始て使つたのだと、本人の直話^{ちまわ}であつた。なる程多くの場合には好く嵌まつてゐる。

併し深山に入つたり、荒海に出たりするやうに、危険が伴はなくては、アワンチュールが成り立たないと云ふものではない。^{ゴオチエヌ}Gautierの小説に、毎朝けふこそは恋人を拵へようと思つて飛び出して、巴里^{パリイ}中を走り廻る青年の事が書いてあつた。それから^{モオパッサン}Maupassantだつたかと思ふ。間違つたら御免なさい。田舎に住んでゐる、極真面目な家の細君が、一生に一度是非浮気がして見たいと思ひ立つて、わざわざ汽車に乗つて巴里へ出る話があつた。それこそ^{ア、アワンチュール}a l'aventureに或る美術商の店に這入ると、番頭と話をしてゐる客がある。

番頭の口から其客の名が漏れる。世に聞えてゐる大家である。細君は奇貨措く可しと、藪から棒に話し掛ける。大家先生不精不精に返事をする。それに構はずに物を問ふ。物を頼む。絡み附いて離れない。不愛相は持前の先生ではあるが、巴里の石畳を靴の裏に踏んでゐて、女に物を問はれて答へずにはゐられない。頼まれて聴かずにはゐられない。絡み附かれて振りほどくことは出来ない。とうとう料理屋に連れて行かれる。^{コオワイテン}珈琲店や舞踏場を引き廻される。次第に夜が更けて来る。先生がもう此辺でお暇^{いとま}を申したいと云ふと、「どうぞあなたの^{アトリエ}atelierへお連れなすつて下さい」と出る。不精不精に承諾する。「御覧の通り一人もので、寝台^{ねだい}も一つしかありません。」「どう致しまして。なる丈お邪魔にならないやうに、小さくなつて臥せります。」女は流石^{さすが}に恥かしいので、顔を隠してちぢこまる。先生は不精不精に樺太の半分で我慢して、境界線

を踏^ミえない限り、なる丈^{だけ}樂^がに仰^{あやむき}向^{むき}になつて、手足を踏^ミみ伸ばして、忽ち高軒^{たかき}で寐^ねてしまふ。先生の寐^ね顔は頗^おる醜^{みにく}い。先生の太^ふつた腹は、呼吸^{こそ}の度に波^{なみ}を打^うつ。女は少しも寐^ねられずにゐて、窓^{まど}の白^{しろ}らむを待ち兼ねて逃げ出す。浮氣^{うき}をして見^みようと思^{おも}つた細君^{こが}が、此^こ失敗^{しぱい}に懲^こり懲^こりして、直^{ただ}ぐに真面目^{まじめ}な生活^{しやうか}に戻^{かへ}つたと云^いふのである。

かう云^いふアワンチュウルの心持^{こころもち}は、若い人^{わかいひと}には、男と女^{おとこ}とを問^とはず、多少^{たうしやう}ある。花見^{はなみ}に行く。芝居^{しばい}に行く。花^{はな}を見たり、藝^ぎを見たりするばかりではない。人^{ひと}を見る。それよりは人^{ひと}に見^みて貰^{もら}ふ。此^こ心持^{こころもち}は始終^{しじう}附^ついて廻^{まわ}る。併^ひし花見^{はなみ}や芝居^{しばい}見物^{けんぶつ}は、改^かめて身支度^{みしだ}をして行く処^{ところ}である。それと違^{ちが}つて、学校^{がく}や勤務所^{くふむしよ}の往復^{かうふく}にも、若い人^{わかいひと}には此^こ心持^{こころもち}がある。否^{いや}。外^{ぐわい}へ出るまでもない。窓^{まど}から往來^{かうらい}を見出^{みだ}してゐる娘^{むすめ}にも此^こ心持^{こころもち}がある。部屋^{へい}にゐて給仕^{きよし}に來^きる小間使^{せうまな}を待^{まち}つ息子^{いっしゆ}にも此^こ心持^{こころもち}があ

る。

それが余^{あま}りにこうじて來^きると、一寸^{いっしゆん}闕^{くわつ}を跨^{また}いで外^{ぐわい}へ出^でるのが、Don Quichote^{ドンキホーテ}が武者修行^{ぶしやうぎやう}の門出^{かどで}をすると同じになる。懷^{いだ}に金^{かね}があるときは、親^{おや}が高利貸^{かうりか}にでも苦められてゐる、美しい娘^{むすめ}に出逢^{であ}ひたいと思^{おも}ふ。金^{かね}なんぞはなくても、責^せめて身^みを投^なげようとする娘^{むすめ}でもゐたらと、橋^{はし}の袂^{たもと}や川岸^{かわし}を見^みて通^{とほ}る。

アワンチュウルの心持^{こころもち}は誰^{たれ}にもある。随^{したが}つて其^{その}心持^{こころもち}がこうじて來^きるといふことが、誰^{たれ}の身^みの上^{うへ}にもあり得^える。物臭^{ものくさ}くて、朝顔^{あさぎ}も洗^{せん}はずに学校^{がく}に行く青年^{せいねん}や、八口^{やくち}の綻^{はな}びを一週間^{いっしゅうかん}も縫^ぬはずに着^きてゐる女学生^{にょがくせい}が、柄^{えい}にない夢^{ゆめ}を見^みて歩^{ある}いてゐる。さういふのは、却^{かへ}て同情^{どうじやう}に値^ちする。此^こ中^{なかつ}に一種^{いっしゆ}のRomantique^{ロマンチック}が認め^{しやうめ}られる。憧^{あこが}れの憧^{あこが}れたる所以^{ゆゑ}は、此^こ辺^{へん}に存^{ぞん}するかも知^しれない。

これに反^{はん}して、兎角^{とかく}魚^{いさな}を羨^{うらや}むよりは網^{あみ}を結^{むす}ぶが好^{この}いと云^いふ風^{ふう}に、万^{ばん}事^じ réaliste^{リアリスティック}に考^{かんが}へて、自^じ分の体^{てい}を人^{ひと}

に見て貰ふ品物として取り扱ひ、平生してゐる事が、凡てアワンチュウルの作戦計画だとなると、罪が深い。

その罪の深い連中に、佐藤君と云ふ先生がある。美術の看板を出してゐる理髪店の定得意で、衣類や持物に凝ること甚しい。そんなら今どんな着物を着てゐるか云ふに、それを書く必要はない。なぜと云ふに、最近の雑誌「みつこし」を開いて見れば、そつくり分かるからである。

ここに書くのは、此佐藤君が近頃経歴した事実である。

頃は春の花盛りの時であつた。此下へ直ぐに人の心も浮き立つと云ふやうな事を書けば、文章も思想も、遺憾なき月並の面目を呈露する次第である。併し事実がそれを許さない。桜は咲いてもなかなか寒い。朝は山の手では、霜や氷を見る。やうやう日がさして来た

かと思ふと、寒い風が西北から吹いて来る。振つて花見に出た人も、動もすればいぢけ勝ちで、たまに瓶詰正宗の附け景氣をして見るものがあつても、周囲に何等の波動をも及ぼさない。男は吹き飛ばされまいと、片手を帽の庇に掛け、片手を外套の隠しに入れて行き過ぎる。女は二重入毛の大廂をばらばらに吹きこはされたり、薄く巧みに掻き揃へた鬢の左右を、雛が翼を張つたやうに吹き開かれたりして、裾の翻へるのを気にしながら行き過ぎるのである。

かう云ふ日の晩であつた。「花月」に宴会があつて、丁度電燈の附く時分に、幹事がどうぞお席へと挨拶する。待つてゐた客がぞろぞろと大座鋪へ出る。

坐布団がぐらりと並べて、間々にはまだ烟草盆でない、火鉢が配つてある。厳めしく儀式張つた席ではないと見えて、坐布団に番号や名前を書いた紙札なんぞは挟んでなかつた。

その為めに、床の間の前の方では、席を譲り合ふ人が二三人あつたが、幹事らしい男の捌きで間もなく治まつた。

違へ棚の側の隅を、折り曲がつて五六人目の処に柱を背にして、佐藤君は据わつた。金縁の鼻目金を掛けた目で、膳を運んで来る藝者を見てゐた。

人を馬鹿にしてゐるやうな顔附の婆あさん藝者やら、近い過去に医者の手を煩はしたのでないなら、近い未来に煩はすだらうと思はれる、血色の悪い、若い藝者やらで、どれと云つて佐藤君の目に留まる女もなかつた。

膳が出てしまつて、お酌の友禪が藝者の紋附きの間に交つて、銚子を持つて来る時であつた。少し遅れて来たものと見えて、先に膳を配つた仲間でない、一人の若い藝者があつて、これも銚子を持つて出て来た。

妻みのある丈が瑕^{きず}瑾^{ぎん}だとも云ひたいやうな際立つ

て美しい女である。銀杏返^{いんぎんかへし}しに四分珠^{しふぶんしゆ}の釵^{かんざし}を挿してゐる。着物は共縞のお召縮緬に、汐干狩の縫模様、対^つの^る下着と云ふ拵^{こしらへ}で、お納戸地に白の模様の金春式^{こんはるしき}韓織^{かんおり}の帯を締めてゐる。

一座をずつと見渡して、佐藤のゐる席から斜め向うになつてゐる、末座の客の前に据わつて、そこにゐたお酌と何か話をし出した。

佐藤は此女から目を放さない。視線は後^{おく}れ毛^げのばら附いてゐる鬢の蔭に、白くほの見えてゐる頸筋から、中肉の肩や背を伝つて、お太鼓に締めた帯の横^はに食^はみ出した、緋縮緬の帶上げの下を、腰の廻りへさまよふのである。尤もこの汐干狩の女に向ける視線は、佐藤のばかりではないので、佐藤が目を放さないのも、別に人の注意を惹く程ではなかつた。

客が吸物を吸つてしまつた頃であつた。酌をしてゐる藝者があちこちで二三人入り代つた。佐藤は今まで

自分の前にゐた、気の毒な程瘦せたお婆あさんが退いたと思ふとたんに、一直線に自分を狙つて、手に銃子を持つて来る女のあるのを見た。それが、別人でない、汐干狩の女であつた。

汐干狩の女は、佐藤の前に膝をとんと衝いた。そして意外にもかう云つた。

「あら。暫く。」

佐藤は内心大いに驚いた。そしてその驚きを極力包み隠さうと努めた。佐藤の爲めには、かう云ふ不慮な出来事は、丁度軍隊の指揮官が部下の大勢ゐる前で、予期してゐない情報を得た時のやうなものである。

Surprise, étonnement, 凡そこんな場合に、普通の人間が平気で顔にあらはす表情筋の運動は、闇から闇へ抑制してしまはなくてはならない。そして電光石火の如く、これに処する所以の道が講ぜられなくてはならない。佐藤の脳髓の中では、求心的機関と、遠心的機

関とが、全速力を以て運転した。

「やあ。どうも。まあ、一つ献じよう。」

佐藤は膳の隅にあつた猪口を取り上げて、半分程あつた酒をぐいと呑み干して、女の前に差し附けた。部隊長なら、即時に決心を附けて、命令を發したやうなものである。そしてその命令は攻勢を取る命令である。女は猪口を受けた。女が臂の長さを隔てた所にゐる結綿のお酌を顧みる隙に、佐藤は女の膝の傍に置いた徳利を、素早く取つて酌をした。女は一口飲んで、猪口を下に置いた。

「あなたあれ切り手紙も下さらなかつたのね。随分だわ。」

此詞には第二の情報が含まれてゐる。あれ切りの「あれ」と云ふ語がそれである。あれは或る積極的の出来事を指示してゐる。併しその出来事は、佐藤の爲めには未知数である。Xである。勿論このXの内容

は推知するに難からざるものである。併し此内容は横に空間の上でどこにあるか。縦に時間の上でいつになつてゐるか。その交叉点を定めることは、全然不可能である。

佐藤は微笑の仮面を被つた。そしてその仮面を小楯に取つて、その蔭で活潑に悟性を働かせてゐる。

最初に「人違へかな」と云ふ問が、佐藤の心の中で発せられた。

酷く肖た人と云ふものは随分ある。孔子は陽虎と見違へられて捕へられたさうだ。こなひだもロンドンの Sidneystreet でロシアの無政府主義者の潜伏してゐる家を包囲攻撃して、とうとう焼討にした跡で、灰の中から死骸は出たが、目ざした一人の Peter と云ふ男は逃げ果せた。それを伊太利で擱まへたと云つて、ヨオロツバ中の諸新聞に電報が載せられた。ところが、その擱まへられた男は、独逸の在郷下士官で、Peter の

写真が自分の顔に肖てゐるところから、友達と賭をして、わざわざ怪しい挙動をして、捕縛させたのであつたさうだ。併し人相書や写真と比べられて、間違へられる位の事はあるとしても、現在の場合にはこれに比して大なる懸隔がある。

一体所謂商売人と云ふものは、お客の容貌を忘れないやうに、記憶を訓練してゐる。一度逢つた人をも容易に忘れることはない。矧てや汐千狩の女は「あれ」を閲してゐる。いつどこで閲したかは知らないが、あれ切りと云ふ詞で言ひ現してゐる時間は、週を以て数ふるものか、月を以て数ふるものかと云ふ位が問題である。恐らくは年を以て数ふる時間ではあるまい。随つて容貌の全体にもせよ、一部分にもせよ、観察者の記憶に障礙を与へる程変化する筈がない。仮りに一步を譲つて、最早何年かの星霜を経てゐて、容貌が多少変化してゐたとしても、商売人が「あれ」を閲した相

手を忘れるといふことは殆ど無いと云ふことである。

佐藤君が嘗て年上の友達に聞いた話がある。二十年程前に、柳橋に小兼と云ふ藝者がゐた。或る時五十円ばかりの金に困つてゐるのを、居合せた客が聞いて、出して遣らうと云ふと、小兼が縁もない人には貰はないと云つた。その時客が、云々の時、云々の所で、云々の事のあつたのを忘れたかと云つた。小兼がそれを聞いて、膝を敲いて、「ああ、さうさう」と云つたと云ふのが、当時名高い話であつたさうだ。それは忘れない筈の事を忘れたから、名高かつたのである。

そんなら記憶を訓練した商売人でありながら、又左程月日が立つてゐないのに、見違へるやうに似た顔と云ふものがあるだらうか。双胎児には朝晩世話をしてゐる親が見違へるやうなものもあると云ふが、それは穉い時の事である。二十を越すまでには、どんなに似た容貌でも、成長して来た間に、どこかに変つた所が出

来てゐる。それだから徴兵に出る双胎児は折々あつても、隊で見分けに困ると云ふ話は聞かない。

そこでどうしても人違へとは思はれない。

若し人違へでないとすれば、なんであらう。初めて見た人を、昔から知つてゐる人として取り扱ふ。かう云ふ行為をなんと名付けたら好からう。一寸その詞に窮する。

日本語が豊富だとか貧弱だとか云ふ議論を、文藝の雑誌なんぞで、折々読ませられたことがあるが、かう云ふ行為をはつきり言ひ現す詞は、日本語にはないやうである。

外国語で此場合に該当してゐる詞を求めたら、先づ *misidentification* とでも云ふべきであらうか。ミステイクイカシヨン。怪しからんわけである。此女の媚のある表情、愛敬のある音調で云ふのを聞けば、温みもあれば柔みもある。今それを赤裸々の概念に翻訳して、ミ

スチファイカションと云つて見ると、乾燥無味で、刺^{あまつさ}へ刺のあるやうな毒々しいやうな処がある。怪しからんわけである。

なぜ此女はそんな事をするのだらう。なんの爲めにするのだらう。その対象として、特に此佐藤が選^えび出されたのは、抑^{おさ}又何故か。

作者が紙に書けば長くてくだくだしいが、實際これ丈の思慮は、佐藤君の脳髓の中を、非常な速度を以て通り過ぎたのである。そしてその總てが、佐藤君の被^かつた微笑の仮面の背後に隠匿せられてゐるのである。

佐藤君の思慮の中には疑惑もある、怪訝^{くわいげん}もある。併し佐藤君の爲めには、当面にこれに処すべき所以の道は、唯一筋しかないやうに思はれた。それは女に逆^{さか}らずに、自分の授けられた^{ロオ}を勤めて、事の自然の発展を待つのである。最初に取つた攻勢を失はずに、決戦を避けて、隙の乗^のすべきものを見出すまで、攻撃

を持続するのである。

これは最初に攻勢を取つた勇氣に不似合な、頗る臆病な策である。苟^{いさ}もミスチファイカションだとまで、訐^{あは}いて穿つて考へたからは、佐藤君の取るべき道は、別に今一筋ある。この今一筋の道が慥かに合理的である。それは思ひ切つて、「もう好い加減にしろ、人を馬鹿にするな、お前は誰だ」と喝破してしまふのである。

併し佐藤君にはそれが出来ない。彼のミスチファイカションらしい、苦い丸薬に被せてある、媚や愛敬^{こころ}の衣^{ころも}が妨害するのである。

佐藤君は笑談のやうでもあり、又笑談でないやうでもある、極めて要領を得ない顔をして、かう云つた。

「実は手紙なんぞを遣るよりはと思つて、とうとう遣らずにしまつたのだ。詰まらないぢやないか。手紙なんぞ。」

「あら。それが薄情なのだわ。なんでももう書いて

ゐるのが間だるつこいやうで、大急ぎでポストに入れて来させて、やつと少し気が落ち着く位でなくては、ほんとに思つてゐると云ふものではないわ。」

「まだそこまで修行が詰んでゐないのだ。」

「あなた好くそんな事が言へますのね。たと馬鹿にして入らつしやい。わたしあの時お話ししたやうになつちまふから。」

佐藤君は第三の情報を得た。「あの時」と云ふのは、前に時間上に定め兼ねた「あれ」の出来事に就いて、その定め兼ねた時間を示したものに違ひない。その時間に汐千狩の女は或る「話」をした。しかもその話の内容は、未来に於ける此女の身の上の one possible を示すものであつたに違ひない。此ポツシビリテエは相手の男、即ち此佐藤にまぎらほしい男が薄情であつたときと云ふ要約の下に成立するもので、勿論それを色々に考へて見ることが出来る。死ぬる。尼になる。

焼酎を飲む。役者を買ふ。外の人に引かせて貰ふ。これなんぞは、更に細別すると、本妻になるのと妾になるのとある。更に更に細別すると、その rival の先生を色々に考へて見ることが出来る。Morgan のやうなアメリカの金持か。和製の金持か。会社員の色男か。盗坊か。官員様か。役者か。角力か。焼け出された女郎屋の亭主か。自然派の小説家か。帝国劇場の立作者か。医者か。坊主か。哲学者か。手品使ひか。政治家か。

佐藤君は自在に空想を馳騁させて、その競争者次第で、此汐千狩の女の姿の勝手に変る有様を、想像して見ることが出来る。引かせた男が外交官で、此女を巴里へ連れて行つて、Poiret に jupe culotte を為立てさせて、そいつを着せて、自動車の合乗をして Champs Elysees を通つてゐるかと思ふと、忽ち相手が神田蔵君の様な相場師になつて、此女に待合を出させる。